

群馬県におけるグリーン・ツーリズムの現状と課題

前橋工科大学 学生会員 ○鈴木 光衛
 前橋工科大学 学生会員 山本 祐之
 前橋工科大学 正会員 湯沢 昭

1. はじめに

わが国は高度経済成長期、安定成長期、バブル成長期と時代を経るにつれて社会構造は大きく変化を遂げ、大量消費社会は終わりを告げた。こうした時代の変遷の中で人々はゆとりや癒しを求めるようになり、ツーリズムの存在価値は大きくなった。

このようにツーリズムは人々の癒しやゆとりを求めるツールとして注目されているだけでなく、近年では地方自治体の地域活性化のアプローチとしても注目されている。しかし、実状としては有名観光地としてマス・ツーリズムを展開する地域が旅行客を集めている一方で、財政力に乏しく、集客効果の高い観光資源のない地方都市や農山漁村地域では観光客の獲得に難航している。しかし、こうした地域においてツーリズムは第六次産業として様々な産業に経済的な波及効果があり、地域活性化のアプローチとしての価値があることは確かである。そこで注目されているのがグリーン・ツーリズム（以下グリーン・ツーリズムは GT と省略する）である。GT は農山漁村地域の文化や普段の生活が観光資源となり、新たな開発の必要がないため、こうした地域でのツーリズムの手段として有効であると考えられる。

わが国において GT は農林水産省が 1992 年のグリーン・ツーリズム研究会中間報告会の中で「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義して以来段階的に基盤的・法的整備が行われてきた。2003 年の農林漁家が体験民宿を行う際の面積要件の撤廃や 2005 年の農山漁村余暇法の一部改正がその例である。こうした法的整備の結果、GT を実施する農林漁業体験民宿の登録件数が増加した。また、前述のような法的整備に加え、基盤的整備により体験施設への宿泊者数が増加し、今後さらなる増加が考えられる(図-1)。こういった振興により GT

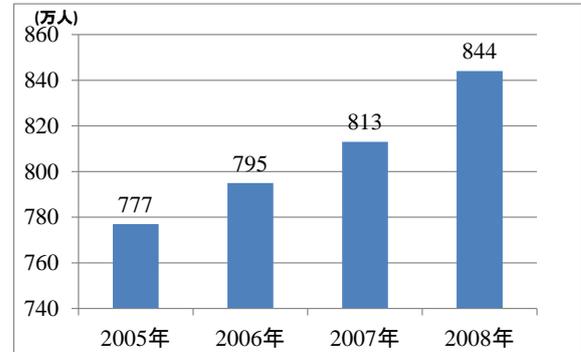


図-1 わが国における GT 宿泊施設への宿泊者数の推移¹⁾

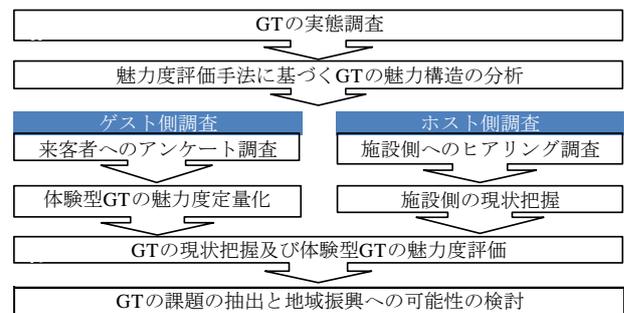


図-2 研究の流れ

が旅行のひとつの手法として認識されつつある。

2. 研究目的及びその手法

研究の流れを図-2 に示す。本研究は GT の質の向上を図り、地域振興へのアプローチとしての可能性を見出すために現状把握、課題の抽出およびその評価を目的としたものである。また、その一つの手法として道の駅「たくみの里」を事例として来客者の GT に対する魅力を定量的に表す手法について検討する。

具体的には①Web や文献による GT の実態把握、②施設側の現状把握及び意識調査、③GT の魅力度の定量化、の大きく 3 つの調査・分析を行った。②の施設側の現状把握及び意識調査には「たくみの里」内の施設を対象とした。また、③の GT の魅力度の定量化に際しては、群馬県により体験型、滞在型、交流型に分類される GT の中でも特に盛んに行われている宿泊を含

キーワード グリーンツーリズム、魅力度評価、歴史文化

連絡先 〒371-0816 前橋市上佐鳥町 460 番地 1 前橋工科大学工学部社会環境工学科

TEL/FAX 027-265-7362 E-MAIL:yuzawa@maebashi-it.ac.jp

まない体験型 GT に着目し評価を行った。

3. 群馬県における GT の実態

群馬県は独自に GT を滞在型、体験型、交流型に分類し、さらに、体験メニューを工作体験や工芸体験、郷土料理体験のできる「ふるさとの生活体験」、収穫体験、栽培体験のできる「農業（果樹）体験」、魚釣りなど川との触れ合いが体験できる「漁業体験」、林業の体験や里山とのふれあい体験ができる「林業体験」、ハイキングやサッカーなど自然とのふれあいやスポーツが体験できる「自然とスポーツ体験」の 5 つに分類している。メニュー毎の体験施設数は群馬県 HP に掲載されているだけで、「ふるさとの生活体験」「農業（果樹）体験」「漁業体験」「林業体験」「自然とスポーツ体験」毎にそれぞれ 99、59、30、39、65 箇所あり（ただし、一施設で複数の体験メニューを行う場合を含む）、2011 年現在、利根・沼田地域など山間部を中心に合わせて約 160 の施設が実施している²⁾。

4. 体験型 GT 魅力度評価

(1) 「たくみの里」の概要(写真-1)

対象地としては GT の体験メニューを網羅しつつ、比較的来場者の見込める道の駅「たくみの里」を対象とした。「たくみの里」は群馬県利根郡みなかみ町新治地区（旧群馬県利根郡新治村）にある道の駅と GT 体験施設の両機能を併せ持った複合的な施設である（図-3）。「たくみの里」の特徴ともいえる点は施設が一カ所に集約する拠点型ではなく施設を各所に点在させた拡散型である点であり、この点は群馬県内各所の GT 体験施設と一線を博すところである。

(2) 「たくみの里」の実態

「たくみの里」の実態把握に際しては 7 ヶ所の体験施設の経営者に対するヒアリング調査を行った（表-1）。まず、経営形態であるがどの体験施設も個人もしくは家族経営ではあるが、「NPO 法人たくみ会」により連携がなされていることがわかった。また、来客者については老若男女問わず訪れるが、特に家族連れの来客者や修学旅行で訪れる小・中学生が多いとの回答が多く聞かれた。リピーター客が多いとの回答も見受けられた。最後に近年の来客状況についてであるが「たくみの里」がテレビ放送などでピックアップされた 10 年前には多くの来客者が訪れたが、近年は減少傾向にあるとの回答であった。



写真-1 「たくみの里」の様子（筆者撮影）

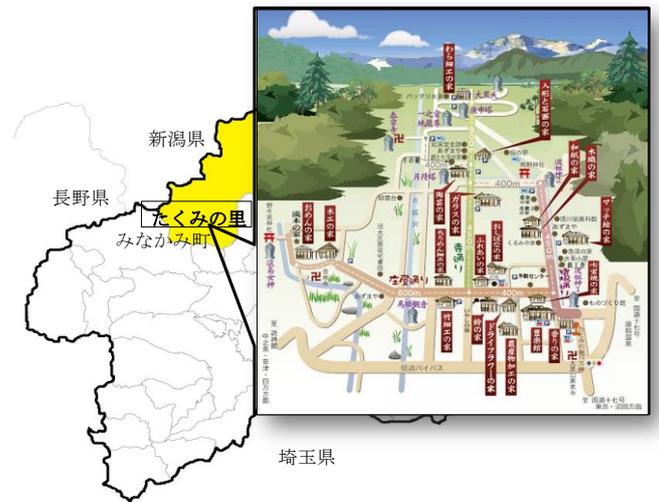


図-3 「たくみの里」の位置³⁾

表-1 施設側に対するヒアリング調査

	道の駅利用者
調査地	道の駅「たくみの里」
調査日	平成24年10月6日～平成24年10月7日
調査対象	七宝焼きの家
	マッチ絵の家
	ガラスの家
	ますや（鉄・工房）
	急須の家
調査方法	ポミエ ヒアリング調査
調査項目	・体験内容 ・来客者の特性 ・施設の現状 ・施設の経営形態 等

(3) 魅力度評価手法⁴⁾

財団法人運輸政策研究機構による「観光地づくりに向けた魅力度評価手法に関する調査」の中で発表された手法である。1.魅力度構成要素の抽出、2.評価の体系化、3.評価基準の設定、4.評価の総合化、5.ウェイトの

設定、の 5 段階から構成され、各項目をもとに観光地の魅力度を定量的に評価していくものである。

(4) ウェイトの設定と魅力度の定量的評価手法

来客者への魅力度評価に際しては 5 段階評価 (1:非常に不満, 2:やや不満, 3:普通, 4:やや満足, 5:非常に満足) の魅力度評価項目をもとにアンケート調査を用いて行った (表-2)。ウェイトの設定には共分散構造分析を用い、本論文においては二次因子モデルを用いた。この二次因子モデルに際しては魅力度評価項目 (観測変数) からなる複数の因子 (潜在変数) を配置し (中項目)、得られた複数の因子からなる総合因子とからなる 2 段階のモデルを仮定した (図-4)。因子の抽出には魅力度評価手法により与えられている観光地の魅力度の体系化をもとに作成した体験型 GT の魅力の体系化を考慮しつつ因子分析を行い決定した (表-3)。また、因子のパラメータ (パス係数、 P_i, P_{ij}) の推定には Amos5.0 を用いて行った (表-4)。魅力度評価得点は以下の評価モデル式により求める。

$$MA_i = \sum a_j \times X_j \quad (j=l,m) \quad (1)$$

$$TA = \sum \beta_j \times X_j \quad (j=l,n)$$

MA_i : 中項目 (i) 評価得点 (100 点満点)

TA : 総合評価得点 (100 点満点)

X_j : 魅力度評価項目に対する満足度

$$0.2 \leq X_j \leq 1.0$$

($X_j=0.2 \rightarrow$ 非常に不満)

($X_j=1.0 \rightarrow$ 非常に満足)

a_j, β_j : パラメータ, $\sum a_j=100, \sum \beta_j=100$

m : 各中項目に含まれる魅力度評価項目の数

n : すべての魅力度評価項目の数

(5) 体験型 GT 魅力度評価の結果と考察

式(1)より求められた魅力度評価得点を図化したものが図-5,6 である。図-5 は全ての来客者の総合的な評価結果を表した図である。全体として全ての中項目に対して 6 割以上と比較的高い評価をしていることがわかる。中でも「歴史・文化」に対しては特に高い評価をしており、「たくみの里」の資源性に対し大きな魅力を感じていることがわかる。これは体験者が普段の生活地とは異なる「たくみの里」の自然や雰囲気を目的としていることに起因していることが考えられる。対して「空間快適性」には比較的低い評価をしていることが分かる。施設間の距離が長く移動が大変なこと、

表-2 来客者に対するアンケート概要

	道の駅利用者
調査地	道の駅「たくみの里」
調査日	平成24年10月6日～平成24年10月7日
配布方法	直接配布
回収方法	郵送回収
配布枚数	800
回収枚数	216
回収率	27%
調査項目	<ul style="list-style-type: none"> ・個人属性 ・利用状況 ・行動内容 ・利用金額 ・利用した感想

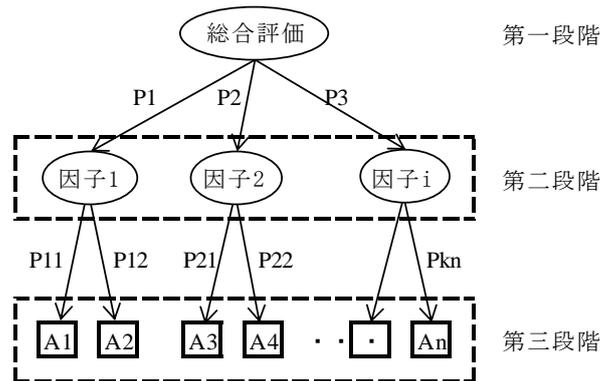


図-4 体験型 GT 魅力度評価の構造 (パス図)

表-3 因子分析による中項目名の決定

記号	魅力度評価項目	因子1	因子2	因子3	因子4
A1	たくみの里全体の自然環境は	0.780	0.077	0.166	0.248
A2	たくみの里全体の景観は	0.767	0.110	0.342	0.040
A3	たくみの里全体の歴史や文化の雰囲気は	0.684	0.285	0.282	0.077
A4	たくみの里全体の清潔感	0.520	0.080	0.149	0.516
A5	お土産の種類多さは	0.112	0.875	0.194	0.175
A6	地域の特産物の多さは	0.209	0.730	0.221	0.223
A7	色々な体験ができることは	0.311	0.174	0.703	0.116
A8	他の旅行者と会話や一緒に体験できることは	0.153	0.043	0.695	0.236
A9	体験工房などの体験施設が多いことは	0.203	0.273	0.632	0.081
A10	施設の職員と交流ができることは	0.184	0.121	0.599	0.309
A11	各施設の職員の親切さは	0.179	0.218	0.515	0.414
A12	観光資源の豊富さは	0.246	0.453	0.482	0.179
A13	野仏や水車小屋などの名所・旧跡は	0.326	0.209	0.421	0.316
A14	たくみの里全体の賑わいは	0.285	0.211	0.343	0.204
A15	トイレの整備状況は	-0.013	0.221	0.119	0.712
A16	休憩所の設置状況は	0.206	0.285	0.245	0.522
A17	たくみの里内の駐車場の混雑状況は	0.112	-0.027	0.040	0.489
A18	歩行時の安全性は	0.085	0.135	0.227	0.467
A19	各施設内の清潔さは	0.339	0.239	0.287	0.428
A20	たくみの里までの行きやすさは	0.076	0.096	0.263	0.388
	固有値	2.650	2.082	3.140	2.502
	累積寄与率	13.25%	23.66%	39.36%	51.87%
	中項目名	歴史・文化	土産・特産物	体験メニュー	空間快適性

表-4 共分散構造分析によるパラメータと評価得点

体験型GT魅力度評価(GFI=0.863)								
総合評価	P_i	中項目名称	P_{ij}	記号	a_j	β_j	MA_i	TA
			1.000	A2	36.1	7.0		
			0.935	A3	33.7	6.6		
0.802	資源性	土産・特産物	0.886	A5	47.0	6.7	64.8	
			1.000	A6	53.0	7.6		
			1.000	A7	18.3	8.3		
1.000	体験メニュー		0.824	A8	15.1	6.9	68.2	
			0.992	A9	18.1	8.3		
			0.852	A10	15.6	7.1		
			0.901	A11	16.5	7.5		
			0.902	A12	16.5	7.5		
			0.870	A15	27.6	5.7		
0.682	空間快適性		1.000	A16	31.7	6.5	63.2	
			0.540	A17	17.1	3.5		
			0.743	A18	23.6	4.9		

自動車と歩行者との共存ができていないことなど施設整備の問題が要因として挙げられよう。

次に図-6 は年齢層別魅力度評価結果である。年齢層の判断には各年代について同伴した子供の数の平均値について差の検定を行い決定した。前述の方法により独身層、ファミリー層、夫婦層 1、夫婦層 2 の 4 つに分類した。詳細には①独身層:大人のみで訪れた割合が多かった 20 歳代以下の層、②ファミリー層:同伴している子供割合の高い 30,40 歳代の層、③夫婦層 1:同伴している子供の割合が低く、子供は自立しているが孫はいないことが考えられる 50 歳代の層、④夫婦層 2:同伴している子供の割合が比較的高く、孫との同伴が考えられる 60,70 歳代の層とした。今回は 4 つの層の中から差異の大きな 2 層を抽出し、図化した。グラフ形状から両層ともに「歴史・文化」に対しては高い評価を、逆に「空間快適性」には低い評価をしていることが分かる。しかし、評価得点には開きがあり独身層ほど「歴史・文化」に対する評価が高く、また、夫婦層 2 ほど「空間快適性」に対する評価が高くなっている。このことは「たくみの里」の持つ自然や雰囲気に対しては若年者ほど魅力を感じ、「たくみの里」の施設整備状況に対しては中高年者ほど魅力を感じていることを示している。若年者ほど普段の生活地とは異なる雰囲気や癒しを、高齢者ほどバリアフリーなど高齢者への対応のなされた施設整備を評価していたからではないかと考える。

5. 結論と課題

本研究は GT の質を向上させ、GT を地域振興の一つのアプローチとして確立させていくために改善すべき点を見出していくものであった。そのひとつの手法として群馬県の現状を把握し、「たくみの里」を事例として施設側に対するヒアリング調査および魅力度評価を行ったものである。以下に結論と今後の課題を述べていきたい。

- (1) GT の歴史や現状を把握することで、今までの歴史的経緯を考慮し、時系列的な変動を見据えた GT の発展を即すことができるのではないかな。
- (2) 既存の評価モデルを用いれば体験型 GT を定量的に測定できることが明らかとなった
- (3) 評価の比較をした結果、総じて体験型 GT において「資源性」は一定の評価を得ているものの、「空間

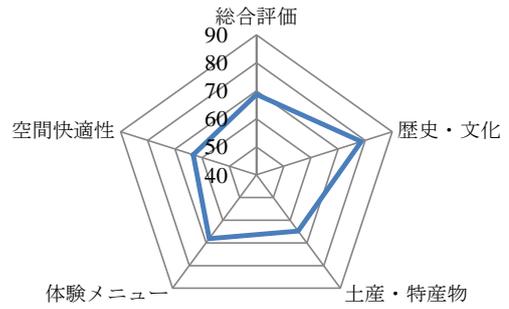


図-5 体験型 GT 評価

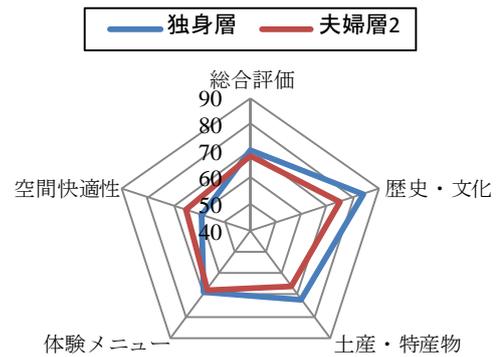


図-6 年齢層別にみる体験型 GT 評価グラフ

快適性」については更なる向上が必要であることが分かった。

本研究は「たくみの里」を事例とし、体験型 GT に限定し、魅力度評価を行ったものである。ゆえに、地域間や GT の種類で評価に差異が生じることが考えられる。そのため、今後の課題は地域間や GT の種類による評価の差異をどのように解消し、一般化した魅力度評価を構築していくかである。

参考文献

- 1) 農林水産省 HP
http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/pdf/1siryu2_1.pdf (2012.6.1.参照)
- 2) たくみの里 HP
http://takuminosato.o-oku.jp/map/area_map.html (2012.6.1 参照)
- 3) 群馬県 HP
<http://www.pref.gunma.jp/01/f3600002.html> (2012.6.1.参照)
- 4) 室谷正裕(1998):観光地の魅力度評価 - 魅力ある国内観光地の整備に向けて -、運輸政策研究、Vol.1、No.1,pp.16~24